

# パチンコの歴史と文化に関する研究

小川 英佑

本研究では、日本の代表的な娯楽であるパチンコの歴史的発展を辿り、その社会的・文化的意義を考察することを目的とした。パチンコは 1920 年代に「コリントゲーム」や「ウォールマシン」を改良した遊技機として誕生し、戦後の高度経済成長期を通じて娯楽産業の一大分野に成長した。その成長過程において、社会情勢や経済環境、技術革新、規制の影響を受け、変容を続けてきた。

本研究は、パチンコの歴史的発展、社会的・経済的影響、技術革新や規制の役割、現代の課題という視点を軸に進めた。特に、1920 年代から戦後にかけての急速な普及、1950 年代以降の「正村ゲージ」や「フィーバー」といった技術革新、1990 年代のプリペイドカードを用いた「CR 機」の登場に着目した。これらの革新は、パチンコの魅力を高めて市場の拡大に貢献する一方で、ギャンブル依存症や社会的批判といった課題も引き起こした。この結果、業界には規制の強化や自主的な対策が求められるようになった。また、こうした問題は業界の存続にリスクを与える要因となり、規制が産業の発展や停滞に大きな影響を及ぼすことが判明した。特に、1950 年代や 1980 年代の規制緩和が市場の急成長を促進した一方、1990 年代以降の規制強化は市場縮小を引き起こし、2020 年代の長期的な低迷につながっている。

また、考察の中でパチンコ産業の存在意義について再評価を行った。単なる娯楽産業としての役割を超えて、戦後日本の経済発展や地域社会の活性化に寄与してきた一方で、依存症対策や持続可能な産業構造の構築が重要であることが示された。また、技術革新を活用しながら社会的責任を果たすことで、パチンコ業界が今後も日本社会において一定の役割を果たし続ける可能性が示唆された。

結論として、パチンコ産業の歴史的な発展とその課題は、日本の文化的・社会的構造の一側面を反映しているといえる。本研究は、パチンコの意義を歴史的な文脈に位置づけるとともに、今後の持続可能な発展のための指針を提供するものである。これにより、社会的批判や規制強化の中で産業がいかに変容し得るかを包括的に理解することが可能となる。